

前漢における「蠻夷降者」と「歸義蠻夷」

熊谷 滋 三

はじめに——問題の所在——

筆者は、前稿において、武帝期のいわゆる「五属国」設置の問題を中心に、前漢における属国制の形成について検討し、「五属国」に始まる前漢の属国制は、(1)匈奴および羌族の降者を、対匈奴・羌族防衛に利用するために、状況に即応した動員が可能な最前線の後背地（最前線と後衛線の中間地域）に留置せしめ、(2)その降者の君長層には漢の爵位を授与して漢側秩序への取込みを図り、(3)属国内では異民族固有の身分秩序や支配システムを承認する一方で、下層の属国民に対しては軍功に応じた賞賜と漢の爵位の授与を行なって漢側秩序への再編を促進し、(4)固有の編成を持つ属国軍を漢の統帥のなかで動かす指揮官として各属国ごとに属国都尉を新設したものであって、初期の属国制は、軍事的に大きな脅威となった異民族に対してとられた軍事色の濃い異民族統治システムであったことを指摘した。しかし、中央政府における属国制管理の最高官と考えられる典属国に関する問題については、今後の課題として検討を

留保した。⁽¹⁾

この典属国について、『漢書』卷十九百官公卿表には「典属国は、秦官、蠻夷の降者を掌る。……成帝河平元年、省きて大鴻臚に并さる」とあり、河平元年（前二八）に大鴻臚に吸収されて廃止されたことがわかる。一方、その大鴻臚について、同じく百官公卿表には「典客は、秦官、諸々の歸義の蠻夷を掌る。……景帝中六年（前一四四）、大行令に更名し、武帝太初元年（前一〇四）、大鴻臚に更名す」とあり、もとは典客といい、典属国が「蠻夷降者」を管理したのに対し、「諸歸義蠻夷」⁽²⁾を管理したことがわかる。したがって、百官表の記事によれば、前漢では、末期の河平元年に至るまで、「蠻夷」すなわち異民族に対して、「降者」と「歸義」という区別をしていたと考えられる。

この点については、前稿でも指摘したが、しかし、従来この区別についてはあまり考慮されていない。たとえば、『漢書』卷六武帝紀、元鼎五年（前一二）夏四月の条に見える「歸義越侯嚴」についての師古注には「張晏曰く、嚴は故越人なり。降りて歸義侯と爲さる」とあり、呉恂『漢書注商』は、卷五五霍去病伝の元狩四年の条に関して「蠻夷の来りて降る者、之を歸義と謂う」と述べるなど、「歸義」の説明に「降」を用いており、両者を区別していない。⁽³⁾

また、手塚隆義氏は、典属国の大鴻臚への併合について言及された部分で、両官の存在を根拠として、「外夷の應對」に区別があったことは指摘されたものの、「大鴻臚も典属國も共に蠻夷を處する官であったが、前者は歸義の蠻夷に處し後者は蠻夷の降者に處した。しかし實際に於ては歸義も投降も本質的には何の異ったものではない」とされ、『漢書』卷八宣帝紀の五鳳三年（前五五）の条に匈奴が「來降歸義」したとあるのを引いて、「歸義とは來降を粉飾した言にすぎない」と述べておられる。⁽⁴⁾ また、栗原朋信氏は、漢の内臣・外臣・客臣について検討された際に、典客と典属国がともに「秦官」であることから、統一秦においても「外臣・外客臣・絶域の朝貢国の区別が存していた」と推定され

ているが、「降者」と「歸義」の区別については触れておられない⁽⁵⁾。

従来、この区別についてある程度まで踏み込んで言及しておられるのは、管見の限り米田賢次郎氏だけで、氏は『漢書』卷十七景武昭宣元成功臣表に見える「匈奴歸義王」について検討され、属国都尉支配下に置かれた匈奴と区別し、「假りに唐代の歸義侯と同じ意味を持つといひ得るならば、『漢』に帰属せず、もとの匈奴のままの身分で、漢と同盟していた匈奴の王」と定義づけることができる」とされ、「彼等は塞外に居住して、漢と同盟して功を樹て、そこで官に叙せられ或は列侯に封ぜられ、始めて完全に漢に服属したのである。従つて『唐の歸義と同じ性格を持つていた』ことになる」と述べておられる⁽⁶⁾。この指摘は興味深いが、「歸義」について「唐の歸義と同じ」とされる根拠は不明で、また「唐の歸義」についても説明がなく、十分な検討が尽くされているとはいいがたい。

このように、『漢書』百官公卿表に見える「蠻夷降者」と「歸義蠻夷」については、それぞれを管轄する典属国・典客(大鴻臚)両官の存在から、漢朝の異民族への対応に何らかの違いがあつたことは認められているにもかかわらず、その具体的内容については明らかにされておらず、また最終的には典属国が大鴻臚(典客)に吸収されたこともあつて、大勢としては、ともに漢に従つた「蠻夷」として、ほとんど同義と見られたり、はなはだしくは混同されたりすることが多く、その区別についてはほとんど考慮されていない。

しかしながら、その区別については、前掲の『漢書』百官公卿表だけでなく、他の史料にも散見する。たとえば、『漢書』卷四九鼂錯伝の鼂錯の上言中に「今、降胡、義渠蠻夷の属の來たりて歸誼(歸義)する者」とあり、また『漢書』卷六九趙充国伝の神爵元年(前六一)の条には「諸、の降羌及び歸義羌侯の楊玉等」とあつて、いずれも、わざわざ「降胡」と「歸誼(歸義)する者」、「降羌」と「歸義羌侯」とを並記し、明らかに「降」と「歸義」を区別して

いると考えざるを得ない。したがって、前漢では、少なくとも成帝期に至るまで、異民族に対して「降者」と「歸義」という区別がなされ、しかもそれにはかなり厳密な意味の違いがあり、典属国・典客（大鴻臚）の両官が設置されていたのも、この区別に基づいて異なる対応をしていたためと考えるべきであろう。とするならば、この問題は、漢代における異民族統御の問題を考えるうえで、きわめて基本的かつ重要な問題である。そこで、以下、この問題について検討し、大方のご叱正を仰ぎたいと思う。

第一節 「蠻夷降者」について

一

前稿において検討した属国制の問題とも関係するので、「蠻夷降者」から検討してみたい。「降者」という用語は、もちろん漢人についても、敵対していた者が投降する場合などにごく普通に使用されている。たとえば、『史記』卷一〇六呉王濞列伝に見える呉楚七国の乱拳兵時に呉王濞が諸侯王に遣った書のなかには、

能斬捕大將者、賜金五千斤、封萬戶、列將、三千斤、封五千戶、裨將、二千斤、封二千戶、二千石、千斤、封千戶、千石、五百斤、封五百戶、皆爲列侯。其以軍若城邑降者、卒萬人、邑萬戶、如得大將、人戶五千、如得列將、人戶三千、如得裨將、人戶千、如得二千石、其小吏皆以差次受爵金。佗封賜皆倍軍法。

とある。一方、異民族に対しては、前掲『漢書』百官公卿表の「蠻夷の降者」、あるいは「胡の降者」（『史記』卷三〇平準書、元狩二年条など）のように異民族を示す字句のあとに「降者」を付けて表現するほか、前掲『漢書』鼂錯伝

や趙充国伝の「降胡」「降羌」のように「降」字のあとに異民族を示す文字を付ける場合も多く見られるが、いずれにせよ、「異民族で漢朝に『降』った者」を指すのは明らかであり、その「異民族の降者」が、漢朝において、具体的にどのように処遇され位置づけられていたのかが問題である。

ところで、前稿では、この問題に関連することとして、(1)属国設置の際には、必ずその降者の君長層に漢の爵位が授与されていたこと、(2)属国では異民族固有の身分秩序や支配システムが維持されたが、下級の属国民に対しても軍功によって漢の爵位が授与される機会が与えられていたこと、の二点を指摘した。⁽⁸⁾すなわち、属国制の下に置かれた異民族には、何らかの形で漢の爵位が授与されていたわけである。くりかえし指摘してきたように、属国制下に置かれた異民族は「降者」であつたから、「異民族の降者」に対する処遇を考えるうえでは、まずこうした異民族への爵位の授与について検討する必要がある。

二

はじめに『史記』『漢書』の各侯者年表・功臣表から検討してみよう。言うまでもなく、これらの史料は列侯授与の記録であり、爵位の授与といっても列侯の場合のみに限られるが、個々の列侯授与の事例をまとめた史料として貴重なものであり、そのなかには異民族に対する事例も多数含まれる。ただし、若干の字句の異同を除けば、基本的に『史記』の記事はすべて『漢書』に含まれるので、ここでは『漢書』卷十七景武昭宣元成功臣表（以下、功臣表と略称）によることとし、そこから異民族への列侯授与の事例を抜き出して整理してみると後掲の表の如くなる。⁽⁹⁾

表 『漢書』 卷十七景武昭宣元成功臣表に見える異民族の封侯者

	侯号・名	民族及び封侯前の地位	封侯理由	封侯年月
1	安陵侯于軍	匈奴王	降	景帝中三年十一月
2	桓侯賜	匈奴王	降	景帝中三年十二月
3	迺侯陸彊	匈奴王	降	景帝中三年十二月
4	容城攜侯徐盧	匈奴王	降	景帝中三年十二月
5	易侯僕䟽	匈奴王	降	景帝中三年十二月
6	范陽靖侯范代	匈奴王	降	景帝中三年十二月
7	翁侯邯鄲	匈奴王	降	景帝中三年十二月
8	翁侯趙信	匈奴相國	降	元光四年十月
9	特轅侯樂	匈奴都尉	降	元朔元年後九月
10	親陽侯月氏	匈奴相	降	元朔二年十月
11	若陽侯猛	匈奴相	降	元朔二年十月
12	涉安侯於單	匈奴單于太子	降	元朔三年四月
13	昌武侯趙安稽	匈奴王	降	元朔四年七月
14	襄城侯桀龍	匈奴相國	降	元朔四年七月
15	遼悼侯王援嘗	匈奴趙王	降	元狩元年七月
16	宜冠侯高不識	校尉（故匈奴歸義）	擊匈奴	元狩二年五月
17	輝渠忠侯僕朋	校尉（故匈奴歸義）	擊匈奴得王	元狩二年五月
18	下摩侯諱毒尼	匈奴王	降	元狩二年六月
19	濕陰定侯昆邪	匈奴昆邪王	降（衆十万）	元狩三年七月
20	輝渠愼侯應疋	匈奴王	降	元狩三年七月
21	河碁康侯烏黎	匈奴右王	降	元狩三年七月
22	常樂侯耦雕	匈奴大當戸	降	元狩三年七月
23	杜侯復陸支	匈奴歸義因孰王	擊匈奴（捕虜三千一百）	元狩四年六月
24	衆利伊即軒	匈奴歸義樓剌王	擊匈奴	元狩四年六月
25	湘成侯敞屠洛	匈奴符離王	降	元狩四年六月
26	散侯董舍吾	匈奴都尉	降	元狩四年六月

27	臧馬康侯離延年	匈奴王	降	元狩四年六月
28	臧侯次公	匈奴歸義王	降	元鼎四年六月
29	術陽侯建德	南越王の兄・越高昌侯	不明	元鼎五年三月
30	昆侯渠復衆	屬國大首渠	撃匈奴	元鼎五年三月
31	騏侯駒幾	屬國騎	撃匈奴捕單于兄	元鼎五年三月
32	臧侯畢取	南越將軍	降	元鼎六年三月
33	安道侯揭陽定	南越揭陽令	降	元鼎六年三月
34	隨桃頃侯趙光	南越蒼梧王	降	元鼎六年四月
35	湘成侯監居翁	南越桂林監	降（貳駱民四十餘萬）	元鼎六年五月
36	外石侯吳陽	故東越衍侯	功（佐東粵繇王）	元封元年正月
37	下邳侯左將黃同	故甌駱左將	功（斬西于王）	元封元年四月
38	開陵侯建成	故東粵建成侯	功（斬東粵王餘善）	元封元年閏月
39	臨蔡侯孫都	南粵郎	功（得南粵相呂嘉）	元封元年閏月
40	東城侯居股	故東粵繇王	功（斬東粵王餘善）	元封元年閏月
41	無錫侯多軍	東粵將軍	降	元封元年
42	涉都侯喜	故南海太守の子	降	元封元年
43	平州侯王映	朝鮮將	降	元封三年四月
44	荻苴侯韓陶	朝鮮相將	降	元封三年四月
45	濼清侯參	朝鮮尼谿相	降（殺朝鮮王右渠）	元封三年六月
46	驪茲侯稽谷姑	小月氏右苴王	降	元封四年十一月
47	瓠譚侯杆者	小月氏王	降（軍衆千騎）	元封五年？正月
48	幾侯張路	朝鮮王子	降	元封五年三月？
49	涅陽康侯最	朝鮮相の子	降	元封五年？三月
50	開陵侯成婉	故匈奴介和王	撃車師	不明
51	歸德靖侯先賢彈	匈奴單于從兄・日逐王	降	神爵三年四月
52	信成侯王定	匈奴烏桓屠菴單于の子・左大將軍	降	五鳳二年九月
53	義陽侯厲溫敦	匈奴諱連累單于	降	五鳳三年二月

これによれば、列侯を授与された異民族出身者は53名で、授与対象の民族について見ると、匈奴が34例でもっとも多いが、他に南越・東越等の越族が12例、朝鮮5例、小月氏2例で、特定の民族や方面に限定されず、広範囲にわたっている。この53名のうち、封爵理由（功状）が「降」となっている者は40名で、約75%を占める。これらの者は、その各民族における地位から見て、いずれも君長クラスの地位にあつた者と判断されるが、このうちで、属国設置時に封爵された者は7例のみであるから、⁽¹⁰⁾ 実は異民族の降者の君長に対する封爵は、属国設置の場合だけに限定されるものではなく、異民族の降者に対する処遇として、一般的に行なわれていたものと考えられる。

さらに、「降」以外の理由によつて封爵された13例についても検討しておきたい。その内訳は、匈奴7例、越族6例となっている。

まず匈奴の7例について見てみると、校尉として驃騎將軍霍去病に従軍した「故匈奴歸義」と記されるものが2例（表の16・17、以下番号のみ示す）、同様に驃騎將軍に従軍した「歸義因孰王」（23）と「歸義樓剌王」（24）が各1例あるが、これら4例はすべて「歸義」の例であるので、第二節で検討する。また、他の3例のうちの2例は「屬國大首渠」（30）「屬國騎」（31）として対匈奴戦で功績をあげたもので、先に指摘した属国制下における下級者への封爵例である。⁽¹¹⁾ 残る1例（50）は、功臣表によれば、「故の匈奴の介和王」として「兵を將いて車師を撃つたことにより開陵侯に封ぜられた成婉なる人物で、封爵時期については「封年を得ず」となっている。しかし、『漢書』卷六六西域伝下の車師の条に、「武帝天漢二年、匈奴の降者の介和王を以て開陵侯と爲し、樓蘭國の兵を將いて始めて車師を撃たしむ。匈奴、右賢王をして數萬騎を將いて之を救わしむれば、漢兵不利にして、引きて去る」とあり、成婉は天漢二年（前九九）に「降者」として封爵され、そのまま樓蘭の兵をひきいて車師を攻撃したことがわかる。おそらく、功臣

表は、封爵と車師への出兵が連続していたために、功状に「兵を將いて車師を撃」ったことをあげたのであろうが、西域伝によれば、結局、情勢不利で退却しており、とくに功績をあげたわけでもないのに、この場合の封爵理由は事実上「降」と考えられる。あるいは、「降」と出兵があわさって封爵理由となったのかもしれないが、「降」が出兵の前提であるから、この事例は異民族の降者の君長に対する封爵の例と見てよいであろう。

次に越族の6例について見てみると、封爵理由がよくわからないものが1例あり、他の5例は武帝が南越・東越を滅ぼした時に封爵されたものである。まずこの5例から見ると、そのうちの1例(39)は、南越の郎という身分で、南越相の呂嘉をとらえた功績により封爵されたものである。『漢書』卷九五兩粵伝(南粵)元鼎六年(前一一一)冬の条には、

樓船自擇便處、居東南面、伏波居西北面。會暮、樓船攻敗粵人、縱火燒(番禺)城。……伏波乃爲營、遣使招

降者、賜印綬、復縱令相招。樓船力攻燒敵、反敵而入伏波營中。遲旦、城中皆降伏波。呂嘉、建德、以夜與其屬

數百人亡入海。伏波又問降者、知嘉所之、遣人追。故其校司馬蘇弘得建德、爲海常侯、粵郎都稽得嘉、爲臨蔡侯。⁽¹²⁾とある。これによれば、番禺城陥落にあたって、伏波將軍は「使を遣わして降者を招き、印綬を賜い、復縦ちて相招

かしめ」、さらに「城中皆伏波に降」ったのち、逃亡した南粵相呂嘉と南粵王建德について、「降者に問い、嘉の之く所を知り、人を遣わして追わしめ」た結果、粵の郎の都稽が呂嘉をとらえたので、臨蔡侯に封じたことがわかる。この記述では、都稽が先に伏波に降った者なのか、それとも呂嘉にしたがって逃亡したものの、呂嘉を裏切りとらえて降った者なのか、判然としないが、後者としても、呂嘉をとらえた行為は漢への「降」を前提としているから、この封爵はあくまでも異民族の降者に対する待遇である。ただし、「郎」は君長クラスと見るには低すぎる地位であるから、彼

が列侯に封ぜられたのは、呂嘉逮捕という特別な功績をあげたためと見るのが妥当であろう。

5 例中の他の 4 例（36・37・38・40）はいずれも東越滅亡の際に封爵されたものである。これらについて、功臣表の号諡姓名と功状戸数には、

外石侯吳陽 以故東越衍侯佐繇王功、侯、千戸。

下鄜侯左將黃同 以故甌駱左將斬西于王功、侯、七百戸。

開陵侯建成 以故東粵建成侯與繇王斬餘善、侯、二千戸。

東城侯居股 以故東粵繇王斬東粵王餘善、侯、萬戸。

とあるが、『漢書』卷九五兩粵伝（東粵）には、

（東粵王）餘善刻武帝璽自立、詐其民、爲妄言。上遣橫海將軍韓説出句章、浮海從東方往、樓船將軍（楊）僕出武林、……元封元年（前一〇）冬、咸入東粵。……故粵衍侯吳陽、前在漢、漢使歸諭餘善、不聽。及橫海軍至、陽以其邑七百人反、攻粵軍於漢陽。及故粵建成侯敖與繇王居股謀、俱殺餘善、以其衆降橫海軍。封居股爲東成侯、萬戸、封敖爲開陵侯、封陽爲卯石侯。……故甌駱將左黃同斬西于王、封爲下鄜侯。

とある。⁽¹³⁾これによると、外石侯に封ぜられた吳陽は「前に漢に在」つたうえ、漢軍が到着すると、「其の邑の七百人を以て反し」て東粵軍を攻撃している。「前に漢に在」つたというのが、すでに漢に「降」つていたことを意味するのか、それとも単に何らかの事情で漢に滞在していた等のことを意味するのか、不明であるが、いずれにせよ、漢軍到着後の行動は漢への「降」を前提としたもの、ないしは「降」そのものと見ることができる。また、甌駱將左黃同が西于王を斬つたのも、同様に漢に「降」ることを前提とした行動であり、繇王居股と建成侯敖は、共謀して東粵王餘善を

殺したのち、「其の衆を以て横海の軍に降」っている。したがって、以上の4例は、すべて封爵理由として功績があげられてはいるが、いずれも「降」がともなうものであり、君長クラスの者であるから、やはり基本的には異民族の降者の君長に対する封爵例と見ることができよう。

残る封爵理由が不明の例(29)についても検討してみよう。これについて、功臣表の号諡姓名と功状戸数の項には、

術陽侯建徳　以南越王兄、越高昌侯、侯、三千戸。

とあり、術陽侯建徳が南越王の兄で越の高昌侯であったことはわかるが、なぜ封爵されたのかはよくわからない。封爵時期については、始封の項に「(元鼎)五年三月壬午封。四年、坐使南海逆不道、誅。」とあるが、『史記』卷二〇建元以来侯者年表には、元鼎四年(前一一三)に封ぜられ、翌五年に「有罪國除」とある。『漢書』卷六武帝紀・卷九五兩粵伝によつて当時の南越情勢を見ると、元鼎四年に、漢人出身の王太后が南越王に勧めて漢への内属を願い出させ、武帝に許可されたが、反発した南越相の呂嘉が、翌年四月に王や王太后らを殺して反し、「明王」(前代の南越王)の長男の粵の妻の子術陽侯建徳を立てて王と爲し(兩粵伝)ているから、功臣表の元鼎五年は誤りで、侯者年表の元鼎四年が正しいことがわかる。こうした情勢を考えると、功臣表・侯者年表ともに「南越王の兄、越の高昌侯たるを以て」としか記していないこの封爵は、元鼎四年に南越が内属を願い出たことに関係する処置という以外には考えられない。すなわち、この封爵は南越の内属にとりなう処置の一つとして、「(内属を願い出た)南越王の兄であり、越の高昌侯であること」そのものを理由とし、南越側の内属反対勢力を懐柔する目的で行なわれたものであろう。内属については小林聡氏の専論にくわしいが、小林氏が前漢における内属事例の一つとしてあげられた東夷の濊君南閼らの内属は、『後漢書』卷八五東夷伝には、

元朔元年（前一二八）、濊君南閭等畔（朝鮮王）右渠、率二十八萬口詣遼東內屬、武帝以其地爲蒼海郡。と記されているのに対して、『漢書』卷六武帝紀の元朔元年秋の条には、

東夷濊君南閭等口二十八萬人降、爲蒼海郡。

とあり、『後漢書』の「内屬」は、『漢書』では「降」と記されている。とすると、内属は「降」の一形態と考えられ、その意味では、南越王の兄で越の高昌侯であつた建徳に対する封爵は、やはり異民族の降者の君長に対する封爵の例として見る事ができよう。

以上のように、功臣表で封爵理由が「降」となっていない13例の異民族に対する封爵事例も、「歸義」が関係するために検討を留保した匈奴の4例を除くと、いずれも「降」が関わる封爵であつたことがわかつた。

ここまでの検討結果を整理してみると、(1)異民族の降者の君長層に対しては、「降」るにあつて、列侯の授与が一般的に行なわれていたこと、(2)属国制下での封爵事例や南越相呂嘉をとらえた南越郎の例などに見られるように、特別な功績があれば、下級者に対しても列侯の授与が行なわれていたこと、(3)内属は「降」の一形態であつたこと、以上の三点が明らかとなつた。これら三点のうち、(1)と(2)に共通する異民族の降者に対する列侯授与という点について、功臣表の序文を見ると、

昔書稱蠻夷帥服、詩云徐方既徠、春秋列潞子之爵、許其慕諸夏也。漢興至于孝文時、乃有弓高、襄城之封、雖自外徠、本功臣後。故至孝景始欲侯降者、丞相周亞夫守約而爭。帝黜其議、初開封賞之科、又有吳楚之事。武興胡越之伐、將帥受爵、應本約矣。後世承平、頗有勞臣、輯而序之、續元功次云。

とある。この冒頭の一文からは、前漢における列侯の授与対象として、異民族が強く意識されていたことがうかがわ

れるが、傍線部にあるように、異民族の降者に対する封爵が定式化・制度化されたのは景帝期と考えられる。これについては、『史記』卷五七周勃世家に付された周亜夫の伝に、

其後匈奴王唯徐盧等五人降、景帝欲侯之以勸後。丞相亞夫曰、彼背其主降陛下、陛下侯之、則何以責人臣不守節者乎。景帝曰、丞相議不可用。乃悉封唯徐盧等爲列侯。

とあり、功臣表の記事を具体的に裏付けるとともに、それは、匈奴対策の一環として、漢への投降促進のために始められたことがわかる。こうしたことは、『漢書』卷九四匈奴伝下の成帝河平元年（前二八）の条に見える光祿大夫谷永・議郎杜欽の対奏のなかに、

漢興、匈奴數爲邊害、故設金爵之賞以待降者。

とあることも合致する。それと同時に、本節冒頭に引用した『史記』呉王濞列伝に見えるように、漢人の場合でも、「降者」に対してその「降」を功として評価し、列侯に封じたり「爵金」を授与したりすることがあったが、この匈奴伝下の記事にも「金爵之賞」とあつて、匈奴の「降者」に対しても列侯とともに金品が授与されていたことがうかがわれるが、「爵」とあることについて考えると、列侯より下の爵位が授与されることもあったのであろうか。ここまでは、列侯授与の例ばかり見てきたが、次にこの点について検討してみたい。

三

異民族に対して列侯よりも下位の二十等爵を授与した例を『史記』・『漢書』から探してみると、『漢書』卷九四匈奴

伝下に

左伊秩訾懼誅、將其衆千餘人降漢、漢以關内侯、食邑三百戸、令佩其王印綬。

という記事が見える。この左伊秩訾は呼韓邪單于の部下で、対漢和親策を推進した人物であつたが、のちに讒言によつて呼韓邪との關係が悪化したため、その処罰を恐れて漢に降つた。その時期については明記されていないが、匈奴伝によれば、元帝の竟寧元年（前三三）正月に呼韓邪單于が来朝したよりも前のこととされているから、呼韓邪が対漢和親策をとつた宣帝五鳳四年（前五四）から元帝建昭五年（前三四）までの間のことであることは疑いない。この記事によれば、衆千余人を率いて降つた左伊秩訾王に対して、爵19級の関内侯・食邑三百戸が授与されており、異民族の降者の君長に授与する爵位は列侯だけではなく、その下の関内侯が授与される場合もあつたことがわかる。

これ以外には、同様の例を『史記』・『漢書』中に見いだすことができないが、出土文書について見ると、敦煌酥油土出土の漢簡のなかに、以下のような一連の簡がある。⁽¹⁷⁾

(a) 擊匈奴降者賞令

(b) ☐ 者衆八千人以上封列侯邑二千石賜黄金五百

(c) 取故君長以爲君長皆令長其衆賜衆如隧長其斬 ☐

(d) ☐ 賦二千石 ☐ 賜詣 ☐ 言及武功者賜爵共分采邑

(e) 二百戸五百騎以上賜爵少上造黄金五十斤食邑百戸百騎

便宜上、各簡に(a)～(e)の記号を付したが、敦煌漢簡については、すでに大庭脩氏の詳細な研究があるので、それに依拠してこれらの簡の内容について整理してみると、(a)は匈奴の降者に対する賞の規定に関する令の名称、(b)と(e)は、

衆八千人以上を率いて降った者には列侯・邑二千戸〔「石」は「戸」の誤記か〕・黄金五百（斤）を、五百騎以上を率いる者には少上造・食邑百戸・黄金五十斤を、それぞれ授与するという降者の君長に対する賞賜規定、(c)は降者の君長にそのまま君長として部衆を統率させるという属国制と同じ規定について述べた部分、(d)はこの令の趣旨について述べた部分、ということになる。⁽¹⁸⁾

これらの点について検討してみると、まず、黄金授与の規定が見えることから、爵位とともに金品の授与が行なわれていたことが裏付けられる。さらに、(e)簡を見ると、「五百騎以上……食邑百戸」という少上造授与規定の文の前後に、それぞれ「二百戸」「百騎」とあって、前後にも同様の規定が存在したと推定されるから、爵15級の少上造やその上下の二十等爵を授与する規定があったと考えられる。授与する爵位の下限についてはわからないが、対象が君長である以上、あまり低い爵位を与えることはなかったであろうから、ある程度までの高爵が、統率する部衆の規模に応じて授与される規定になっていたのであろう。また、(c)簡には「故の君長は以て君長と爲し、皆其の衆に長たらしむ」とあり、大庭氏が指摘されるごとく、固有の身分秩序や支配システムが維持された属国制の内容と合致するが、(a)簡には「降者賞令」とあり、一連の簡にも属国の字句は見えないから、属国制に限定する必要があるかもしれない。いずれにせよ、降者集団内部の身分秩序が維持されたということは、集団内部の下級の君長もその地位を保ったことになるから、下級の君長も爵位授与の対象となっていたことがわかる。

なお、大庭氏は、この令は「漢の勢力が匈奴より弱い時には考えられない内容だから、匈奴と漢の勢力が逆転して以後」に出されたと指摘されたうえで、「元狩二年（前一二）秋に匈奴の渾邪王が衆四万人を率いて来降し、そのために五属国を置いた時の可能性が強い」と述べておられる。衆四万人の「降」に対して昆邪王以下五名が列侯に封ぜ

られているから、四万人を五等分したとすれば各々八千人、この令の列侯授与規定とまさに合致する。ただし、先に指摘したように、功臣表の序文によれば、異民族の降者に対する「封賞之科」は景帝期に始まったものであるから、この令そのものについては五属国設置時に出された可能性もあるが、何らかの規定は、すでに五属国設置以前から設けられていたと考えるべきであろう。また、(a)簡にあるように、この令は匈奴の降者に対する規定であるが、他の異民族についても、当然同様の規定が設けられていたと考えられる。

四

ここまでは、異民族の「降」にあたって、列侯以下の爵が授与されていたことについて検討してきたが、『漢書』卷九五西南夷伝の元封二年（前一〇九）の条を見ると、

滇王始首善、以故弗誅。滇王離西夷、滇舉國降、請置吏入朝。於是以為益州郡、賜滇王王印、復長其民。西南夷君長以百數、獨夜郎、滇受王印、滇小邑也、最寵焉。

とあって、滇王は「國を擧げて降」つた際に「王印を賜」っており、さらに夜郎と滇だけが王印を与えられたことが伝えられている。⁽¹⁹⁾これについては、一九五六年に雲南省晉寧石寨山六号墓から「滇王之印」が出土したこともあって早くから注目され、西南夷伝の記事や印の特徴などから、漢朝の異民族に対する処遇のなかでも特例と見られてきた。⁽²⁰⁾「降」にあたって、列侯等の爵位を授与した形跡がなく、滇王・夜郎王として王印を授与するというのは、異民族の降者に対する処遇としても、ここまで見てきた例とは明らかに異なっている。そこで、以下、この点について検討して

おきたい。

まず、王印授与という点についてみると、先に検討した例のうち、関内侯を授与された匈奴の左伊秩訾王の場合は、その関内侯授与を伝える前掲『漢書』匈奴伝の記事に「其の王の印綬を佩せしむ」とあり、関内侯の授与と同時に、匈奴固有の地位である左伊秩訾王の印綬をも与えられていたことがわかる。すでに指摘したように、降者の君長は「降」の後も被支配民に対する支配権を維持しており、その民族内部における身分秩序に変更はない。したがって、この場合も、史料に特記されている「王の印綬を佩」したこと自体は特殊なことであろうが、関内侯と左伊秩訾王の地位を同時に持つのは特殊なことではない。漢の爵位と異民族固有の地位とを併せ持つのは、異民族の降者の君長に共通する点なのである。

この点をふまえて、滇と夜郎の場合について見てみると、前掲西南夷伝には「復其の民に長たらしむ」とあつて滇王に被支配民への支配権を維持させているから、滇王としたこと自体は従来の支配権を持つ地位を認めたにすぎず、降者の君長に対する通常の処遇である。その点では、史料に明記されていないが、夜郎王の場合も同様であろう。したがって、この場合、降者の君長に対する処遇として特徴的なのは、漢の爵位を授与された形跡がない点と、異民族固有の王号の印を授与された点である。

これらの点について明らかにするため、まず滇の「降」とそれに対する処置について、前掲の西南夷伝の記事を検討してみると、「滇、國を擧げて降り、吏を置き入朝せんことを請う。是に於て以て益州郡と爲し、滇王の王印を賜い、復其の民に長たらしむ」とあり、この過程を整理すると、「降」↓「請置吏入朝」↓益州郡設置↓王印授与↓王の支配権承認となる。このうちの「請置吏」↓新郡設置（郡県化）という点に注目すると、西夷諸国の内属を伝える『史

「記」卷一一七司馬相如列伝の記事のなかにも、新県設置の前段階に「請吏」とあり、小林氏の指摘される郡県化をもなう内属のケースに見られる過程と一致する。⁽²¹⁾先にも指摘したように、内属は「降」とも表現され、「降」の一形態と考えられるから、以上の検討から、この時の滇の「降」は内属であったことがわかる。

そこで、前漢における他の内属事例について見てみると、南越・東夷滅君南閩・西南夷諸族・西域諸国などがあげられるが、⁽²²⁾すでに見たように、功臣表の記載には、こうした内属にあたって列侯が授与された例は、南越王の兄建徳の例以外には見えず、また、他の史料においても、列侯以下の漢の爵位が授与された例を見いだすことはできない。

それでは、王印の授与という点については、どうであろうか。西域諸国の場合を見ると、『漢書』卷九四西域伝下の末尾には、

最凡國五十。自譯長、城長、君、監、吏、大祿、百長、千長、都尉、且渠、當戸、將、相至侯、王、皆佩漢印綬、凡三百七十六人。

とある。ここに列挙されている訳長から王までの地位（称号）は西域諸国固有のもので、それに対して「皆漢の印綬を佩」せしめたというのは、それらの君長号の印綬を授与していたことを意味すると考えられるから、これは滇・夜郎に対して異民族固有の王号の印を授与したと同様の処置と言えよう。そこで、滇・夜郎以外の西南夷諸族の君長らについて見ると、印綬の授与を示す史料を見いだすことはできないが、内属後の状況を伝える西南夷伝の記事には、たとえば昭帝始元五年（前八二）の条に、

上曰、鉤町侯亡波率其邑君長人民擊反者、斬首捕虜有功、其立亡波爲鉤町王。

⁽²³⁾とあり、また、

至成帝河平中、夜郎王興與鉤町王禹、漏臥侯僉更舉兵相攻……（夜郎王興）從邑君數十人入見（牂柯太守陳）立。とあつて、鉤町侯・漏臥侯、あるいは鉤町侯・夜郎王の下の邑君・邑長などの例が散見し、内属して郡県が設置された後も各君長が固有の地位を保持していることがわかるが、西域諸国の例から見ても当然その地位に対する漢の印綬が授与されていたであらう。

以上の検討から、内属は「降」の一形態であるが、内属の場合の君長への処遇は一般の「降」の場合とは異なり、原則として漢の爵位は授与せず、その固有の地位に対する漢の印綬を授与してその地位と権限を承認するという処置がとられたと考えられる。なお、こうした場合に授与される印綬の規格については、本稿ではくわしく論じる余裕がないが、印文についてのみ触れておくと、「滇王之印」について、従来これを漢朝による特例扱いとする見解では、外臣印の場合に冠される「漢」字がない点と、内臣の諸侯王ならば「某王之璽」となるところが「印」となっている点を指摘するが、ここまでの検討結果から見ても、この場合の「王」は異民族固有の王号であるから、諸侯王と同格にはなりえない。一方、「漢」字の有無については、小林氏が指摘されるように、この内属は内臣となることを意味するから、⁽²⁴⁾外臣印の規格である「漢」字を冠しないのもまた当然である。したがって、内属君長に授与される印は、「滇王之印」に限らず、すべて「漢」字を冠しないものであつたのではなからうか。⁽²⁶⁾そうすると、特例とされる滇王と夜郎王の待遇だが、固有の称号の印綬を授与されてその地位と権限を承認されたという点においては、他の内属君長とは何ら差はなく、特別なのは、前掲西南夷伝に「西南夷の君長百を以て數うるに、獨り夜郎、滇のみ王印を受く」とあるように、西南夷の内属した多数の君長のなかで、王号を承認されたのが二国のみであつたという点につきよう。

このように考えると、むしろ特例として注目すべきは、先にあげた匈奴の左伊秩訾王の例である。すでに指摘した

ように、降者の君長の場合は漢の爵位と異民族固有の地位とを併せ持つが、印綬の制度は漢の制度であるから、降者の君長が漢の爵の印綬を持つ場合には、固有の地位の印綬まで持つ必要は本来ないはずである。左伊秩訾の場合は、関内侯を授与されているから本来は関内侯印を持つはずだが、そのうえに、左伊秩訾王の印綬を佩せられている。もし、漢の爵の印綬と固有の地位の印綬とをともに所持するのが通例ならば、わざわざ史料に特記することはしないであろうから、この事例は特例とみるべきであろう。とすると、これはどのような意味を持つ特例なのであるうか。

ここで、先の「滇王之印」が内属異民族に与える王印として通常の規格のものとする考え方に立てば、当然、その規格は同じ王印である左伊秩訾王の印にも当てはまるから、その印は金印であったことになるが、関内侯印はそれより一ランク下がる鍍金印である。この場合は、関内侯と左伊秩訾王との二つの印綬を授与されたのか、身分は関内侯だが印綬は左伊秩訾王のもののみ授与したのか、双方の場合が想定されるが、⁽²⁷⁾いずれにせよ、鍍金印を持つべき関内侯に左伊秩訾王の金印を授与したとすれば、この特例の意味が明らかとなる。すなわち、金印は漢の爵印では列侯印に相当するから、これは匈奴内部の身分秩序に配慮した優遇特例なのである。本来、関内侯より優遇するのならば、列侯を授与すればよいのだが、彼は千余人を率いて降つたにすぎず、本来の列侯授与の基準を満たしていないうえ、他の匈奴の降者の君長との身分関係等において、左伊秩訾王に列侯を授与しにくい事情が存在したのであろう。彼は呼韓邪單于の対漢和親策を推進した人物で、その功は漢側から高く評価されるべきものであったから、漢はその功にこたえて列侯を授与すべきところを、そうした事情に配慮して上記のような特例措置をとつたものと考えられる。⁽²⁸⁾

五

ここまで、「降」の一形態である内属の場合の君長への処遇と、それに関係して降者の君長に対する優遇特例について検討した。その結果から見ると、内属君長には原則として漢の爵位は授与せず、その固有の地位に対する漢の印綬を授与してその地位と権限を承認するという処置がとられたが、その印は「漢」字を冠さない点では内臣印の規格が適用される一方で、王印が列侯印の規格を採用していると考えられることから、王以下の固有の地位は、漢の二十等爵の列侯以下の爵位に相当するものとして位置づけられていたと考えられる。南越の内属願い出を伝える『漢書』卷九五兩粵伝の記事に、南越王が「内諸侯に比せられんことを請」うたことが見えるのも、その一例と考えられ、漢の印綬を授与される内属異民族固有の地位は、漢の二十等爵に「比」せられるものだったのであろう。一般の降者の君長が漢の爵位を授与されたのに対して、内属した君長にこうした処置がとられたのは、おそらく、「降」の一形態ではあるものの、内属が異民族のより自発的な行為であるため、その独自性を尊重したためであらう。⁽²⁹⁾

しかし、その固有の地位も、漢の印綬を授与される以上は、漢の二十等爵に類似した意味を持っていたようで、たとえば、前掲の『漢書』西南夷伝では、戦功をあげた鉤町侯は王とされており、その地位は漢朝に対する功罪によって上下させられるものであったと考えられる。これは、各君長に固有の身分と権限を認める一方で、その身分秩序を漢の二十等爵制に「比」することによって、漢がそれをコントロールしようとするものである。

このように、漢人とは区別されつつも、漢の統制下におかれた彼らは、内属とともに内臣として扱われたのである

から、その内属を含む「降」という行為は、異民族が内臣となることを意味するものであり、それは理論的には漢人と同じになることを意味するから、「降」とは異民族が漢人となることを意味するものとも言えよう。このことは、たとえば、『漢書』卷六八霍光伝に見える昌邑王賀廢位の際の皇太后への上奏文などにもあらわれている。上奏文には、丞相楊敞、大司馬大將軍霍光以下、群臣36名が名をつらねているが、その10番目の隨桃侯昌樂は、南越から「降」つて隨桃侯に封ぜられた人物である。しかし、他の漢人の群臣と区別される特殊な記述は一切なく、まったく同様に扱われている。⁽³⁰⁾

それならば、君長に率いられて降つた民の場合はどのように処遇され、位置づけられたのであろうか。降者の民についての史料は乏しいが、属国制では、属国民は君長の支配下で固有の身分を維持したまま属国に居住し、従軍して功績をあげた場合には、賞賜や列侯の授与を受けることができた。⁽³¹⁾先に検討した降者に対する列侯授与の例のなかにも、南越郎という君長より下位の者が、降る際の功績によつて列侯を授与された例が見られたから、属国民に限らず、一般の降者の民に対しても、功績をあげた者にはそれに応じた賞賜・爵位を授与することがあったことがわかる。とすると、君長に漢の爵位と異民族固有の地位とを併せ持たせていたことから考えても、その支配下の降者の民に対しては、固有の身分を維持させたのみで、漢の爵位に関わる措置を一切行なわなかったとは考えにくい。

しかし、一方で『漢書』卷九四匈奴伝上の神爵二年（前六〇）の条を見ると、

單于將十萬餘騎旁塞獵、欲入邊寇。未至、會其民題除渠堂亡降漢言狀、漢以爲言兵鹿奚盧侯。

とあつて、侵寇計画を通報した匈奴の降民の題除渠堂を言兵鹿奚盧侯としているが、この侯位は漢の二十等爵（列侯）ではないと判断される。⁽³²⁾ また、属国制の場合でも、『漢書』匈奴伝上の元鳳三年（前七八）の条には、張掖に侵入した

右賢王・犁汗王の部隊を迎撃し、犁汗王を射殺した「属国千長の義渠王の騎士」に対して、「黄金二百斤、馬二百匹を賜り、因りて封じて犁汗王と爲す」とあり、属国民が功績をあげた場合でも、漢の二十等爵が授与されるとは限らなかった。⁽³³⁾この騎士を犁汗王に封じたのは犁汗王射殺という功績を記念する意味からであろうが、犁汗王は匈奴固有の王号であるから、この処置は匈奴固有の地位を引き上げるものであったことになる。

このように、降者の民の場合は、功績をあげた者に対する処遇を見ると、列侯を授与することもあったが、言兵鹿奚盧侯のように、漢が設定した侯位ではあるが二十等爵ではない爵位（称号）を授与したり、あるいは異民族固有の地位を引き上げるといったさまざまな処置がとられている。また、先の列侯授与の例を除くと、降者の民に漢の二十等爵が授与されたことを示す例は他に見いだすことができない。

一方、内属の場合は、先に検討したように、君長でも漢の爵位は授与されず、固有の地位に対する漢の印綬を授与されてその地位と権限を承認されるのみだったが、その地位は漢の二十等爵に「比」せられるものであった。小林氏は、内属民は何らかの形で漢朝に対する租税負担を負わされ、「一般の漢人とは區別されつつも、王朝の『民』の範疇に入れられた」と指摘しておられるが、内属民が、租税負担を負うような形で漢王朝に把握される「民」であったならば、当然、彼らの身分・地位は何らかの形で漢の身分秩序のなかに位置づけられていなければならないまい。とすると、君長には漢の爵位が授与されないのに、その支配下の民には二十等爵が授与されたとは考えがたいから、内属民に対しても、君長と同様、その固有の身分・地位を漢の二十等爵に「比」する処置がとられたことが想定される。漢朝がこうした処置をとっていたことを直接示す史料は見いだしできないが、『後漢書』南蛮西南夷伝の巴郡南郡蛮の条に、

及秦惠王并巴中、以巴氏爲蠻夷君長、世尚秦女、其民爵比不更、有罪得以爵除。

とあるのは、時代的には戦国秦にさかのぼるが、そのことを傍証する史料と言えよう。⁽³⁵⁾

内属民についてこのように考えられるとすれば、属国民や一般の降者の民に対しても同様のことが考えられよう。

たとえば、属国制の場合、居延漢簡に「属国胡騎兵馬名籍」という簡が見え、⁽³⁶⁾属国民が軍事動員のために把握され、また何らかの形で従軍の義務を負わされていたことがわかるが、「名籍」が作成される程度まで漢朝に把握され、また従軍することで功績をあげる機会も多かったと考えられることから見れば、やはりその身分・地位は何らかの形で、それもかなり明確な形で、漢の身分秩序のなかに位置づけられていなければならなかったはずである。また、一般の降者の民は、独自性を尊重された内属の場合や、軍事的性格の強い属国制下に置かれた場合とは異なり、もともと一般漢人に近い扱いを受けたと考えられるから、二十等爵を授与される場合もあったと考えられる。

以上、「蠻夷降者」について検討した。その「降」には内属も含まれ、それに対する漢朝の対応には、それぞれの状況に応じたさまざまな処置があったが、どのような場合であれ、異民族の「降」が持つ意味は内臣となることであり、理論的には漢人となることでもあった。それでは「歸義蠻夷」とは何であろうか。次にこの問題について検討したい。

第二節 「歸義蠻夷」について

一

前節で検討した「降者」の語が、漢人に対しても普通に使われていたのとは対照的に、「歸義蠻夷」の「歸義」という語は、漢代においては、ほとんどすべて異民族に対して、あるいは少なくとも異民族が関係する文脈のなかで用いられている。⁽³⁷⁾

一方、先秦時代における「歸義」の用例を探してみると、『商君書』卷四徠民篇に「諸侯の士の來りて歸義する者」と見えるが、このほかにその用例を見つけることは困難である。このことは「歸義」の語が戦国秦に始まるものであった可能性を示唆し、「歸義蠻夷」を管理した典客が「秦官」と伝えられていることも符合するが、この記事では、「歸義」の主体は「諸侯の士」であつて「蠻夷」ではなく、また前後の文にも異民族に関する記述は見えないから、漢代の用例とは異なっている。

「歸義」という語は、「義に歸す」と読めるが、たとえば『晏子春秋』内篇諫下には、

誠于愛民、果于行善、天下懷其德而歸其義。……天下不朝其服、而共歸其義。

とあり、「其の義に歸す」という表現が見られる。この一節は、景公の「吾聖王の服を服し、聖王の室に居らんと欲す。此の如くんば、則ち諸侯其れ至らんか」という問いに対する晏子のこたえの一部で、君主が「民を愛すること誠、善を行なうこと果」であれば、「天下」は「其の義に歸す」だろうと述べている。このことから見ると、「歸義」とい

う語は、もとは異民族に限定されるものではなく、広く天下の者が聖王の「義に歸す」という意味で使われるものであつたと考えられるが、同じく『晏子春秋』内篇問下には、

百姓内安其政、外歸其義。

とあり、「其の義に歸す」主体は「外」となっている。前掲の『商君書』の「歸義」の主体は「諸侯の士」であつたが、戦国秦にとつての諸侯は言うまでもなく他国であり、「外」の国であるから、この点で両者の用法は一致する。ただし、これらの場合でも、「外」が異民族を意味しているわけではないから、やはり漢代の「歸義」の用法とは異なるが、前漢文帝武帝期の人である韓嬰の著作『韓詩外伝』巻八を見ると、

方外遠人歸義、重譯執贄。

とあり、「歸義」の主体は「方外遠人」でやはり「外」を示しているが、あとにつづく「重譯」という語は「方外遠人」が異民族であることを示唆している。⁽³⁹⁾ 前掲の『商君書』や『晏子春秋』内篇問下の記事からは、ある国の「外」の者がその国の君主の「義に歸す」という構造を想定することができるが、その構造を、中国を統一した漢王朝の場合に適用してみると、その「外」は基本的に「蠻夷」すなわち異民族の世界となるから、そのために、漢代では「歸義」が異民族に対して用いられるようになったのであろう。

それでは、「歸義」という語は、どのような意味を持つていたのであろうか。先の『晏子春秋』の用例から、「歸す」はつく・なつく・帰服する・帰順するといった意味に解されるから、問題は義の意味である。武帝期までの前漢前半期の「歸義」の用例を見ると、「歸誼」とする場合が散見する。本稿のはじめにも引用した『漢書』巻四九鼂錯伝に「義渠蠻夷之屬來歸誼者」とあるのはその一例であるが、巻四四淮南王伝には「諸從蠻夷來歸誼」とあり、さらに巻五六

董仲舒伝にも「説徳歸誼」とある。したがって、「義」は「誼」と同義と考えられるが、『説文解字』三上に、誼は「人の宜しき所なり」と見え、『漢書』卷五八公孫弘伝に見える元光五年（前一三〇）の公孫弘の対策文中には「義とは宜なり、……是非を明らかにし、可否を立つ、之を義と謂う」とあって、「義」とは正邪曲直を明らかにすること、いわば「正義」のことと解される。そして、賈誼の『新書』卷四匈奴・勢卑の二篇に「陛下の義に歸す」という表現が見えるように、その「正義」を持つ者は、言うまでもなく、君主（皇帝）であつた。したがって、「歸義」という語は、本来「〔外〕の者が」君主の正義に帰服する」という意味であつたと考えられる。

二

ここまでは「歸義」本来の語義とその用法について検討したが、それによつて漢における「歸義蠻夷」を解釈してみると、「漢朝皇帝の正義に帰服した異民族」という意味となる。そうすると、これは、前節で検討した「蠻夷降者」とは具体的にどのような違いがあり、また、漢朝においてどのように処遇され位置づけられるものであつたのであろうか。

前節で検討したように、「蠻夷降者」の君長らには列侯が授与されたが、『史記』卷十九惠景間侯者年表の序文を見ると、

及孝惠訖孝景間五十載、追修高祖時遺功臣、及從代來、吳楚之勞、諸侯子弟若肺腑、外國歸義、封者九十有餘。とあり、惠帝から景帝までの間における封侯者を概説的に列挙したなかに、「外國歸義」をあげている。ところが、表

中には、高祖の騎將として従軍した越人の子として高后期に封侯された者が1例、景帝期に降った匈奴の王が7例、計8例の異民族の封侯者を数えることができるが、「⁽⁴⁰⁾歸義」の語を付された者は一人も見えない。この8例について見ると、高后期の例は越人ではあるが、高祖の騎將として従軍した者の子であるから、序文の「追修高祖時遺功臣」にあたり、異民族の封侯者と見るのは適当ではない。とすると、表の中で序文の「外國歸義」に該当するのは、景帝期の匈奴の王7例以外には考えられないが、いずれも「降者」であるから、序文の「歸義」は「降者」を意味することになる。

さらに、『史記』卷一一七司馬相如列伝に見える巴蜀の民に対する檄文のなかに、

南夷之君、西僊之長、常效貢職、不敢怠墮、延頸舉踵、喁喁然皆爭歸義、欲爲臣妾、道里遼遠、山川阻深、不能自致。

と見える。これは建元六年（前一三五）の夜郎などの内属（犍爲郡設置）直後のことであるが、「皆争いて歸義し、臣妾と爲らんことを欲す」とあり、やはり「降」の一形態である内属についても「歸義」と表現している。また、この檄文は、『漢書』卷五七司馬相如伝にもほぼ同文が引用されているが、「皆爭歸義」の部分は「皆鄉風慕義」と書き換えられている。とすると、「歸義」は「慕義」とも表現できることになるが、『漢書』卷六四下賈捐伝に引用された珠厓郡廃止の元帝の詔「初元元年（前四八）」には、

其罷珠厓郡。民有慕義欲内属、便處之。不欲、勿彊。

とあって、やはり内属について「慕義」という表現を使用しており、これも内属について「歸義」と表現する場合があったことを示唆する例と言えよう。

これらの「歸義」の用例から見ると、「歸義」は、内属を含む「降者」ないしは「降」と同義で、⁽⁴¹⁾「慕義」と書き換えられることもあった。この「慕義」すなわち「義を慕う」という表現は漢朝への異民族の帰順を美化した表現であるから、まさに「歸義」とは来降を粉飾した言にすぎない⁽⁴²⁾ことになるが、しかし、「歸義」ないしは「慕義」という語は、「降」や内属ではない場合にも使用されている。たとえば、『漢書』卷八宣帝紀の甘露二年（前五二）十二月の条には、

匈奴呼韓邪單于款五原塞、願奉國珍朝三年正月。詔有司議。咸曰、……匈奴單于鄉風慕義、舉國同心、奉珍朝賀、自古未有也。

とあり、匈奴の呼韓邪單于の帰順に対して「鄉風慕義」という表現を用いている。呼韓邪單于の帰順に対しては、いわゆる客臣として処遇することになったから、⁽⁴³⁾この場合は明らかに「降」や内属とは異なる。さらに『漢書』卷九四匈奴伝下を見ると、

建平四年（前三）、單于上書願朝五年。時哀帝被疾、……可且勿許。單于使辭去、未發、黃門郎揚雄上書諫曰、……今單于歸義、懷款誠之心、欲離其庭、陳見於前。

とあり、客臣とされた匈奴單于の入朝の願い出に対しても、やはり「歸義」と表現している。

また、『漢書』卷五六董仲舒伝に見える董仲舒の上言には、

夜郎、康居、殊方萬里、說德歸誼、此太平之致也。

と見え、夜郎と康居について「歸誼（歸義）」と記している。再三とりあげたように、夜郎の場合は内属したものであるが、西域の康居については、『漢書』卷九六西域伝に、

而康居、大月氏、安息、罽賓、烏弋之屬、皆以絶遠不在數中、其來貢獻則相與報、不督録總領也。

とあるように、他の内属した西域諸国とは異なり、大月氏などともに「絶遠を以て數中に在らず、其の來りて貢獻すれば則ち相與に報ず」る存在であつたから、本来は絶域であり、貢獻しても外臣とはされず、朝貢国として扱われる存在であつたことがわかる。

以上のように、「歸義」は、「降者」から客臣や朝貢国（絶域）まで幅広い範圍の異民族を対象とし、漢の内臣となる「降」・内属から單なる朝貢に至るまで、さまざまな行為に対して使用されている。また、「歸義」は「慕義」と書き換えられる場合もあつたが、このほかにも、前掲の甘露二年（前五二）の匈奴の呼韓邪單于の帰順について、『漢書』卷七八蕭望之伝に「郷風慕化」と見え、『漢書』卷九四匈奴伝下の揚雄の上書には、

逮至元康、神爵之間、大化神明、鴻恩溥洽、而匈奴内亂、五單于爭立、日逐、呼韓邪攜國歸化、扶伏稱臣、然尚羈縻之、計不顯制。

とあつて、神爵二年（前六〇）秋の日逐王先賢揮の「降」や甘露二年の呼韓邪單于の帰順について「攜國歸化」と表現している。このように「歸義」は、「慕義」のほか、「慕化」「歸化」とも書き換えられているが、他の語に書き換えられるということは、こうした場合に使われる「歸義」が、限定された意味を持つ特定の用語ではないことを示唆している。したがつて、ここまでの検討結果から見ると、⁽⁴⁴⁾「歸義」という語は、異民族が漢朝に対して従属的・和親的な態度をとる場合すべてに使われる一般的用語と考えられる。ところが、そのように一般的用語と考えると、解釈に疑問を生じる用例も存在する。たとえば、第一節で検討した功臣表に見える「故匈奴歸義」あるいは「歸義」のつく王号などがそれである。

まず、功臣表の「歸義」の用例を含む者について、その号諡姓名と功状戸数をあげてみると、次のごとくである。⁽⁴⁵⁾

宜冠侯高不識

以校尉從票騎將軍再擊匈奴。侯、一千一百戸。故匈奴歸義。

煇渠忠侯僕朋

以校尉從票騎將軍再出擊匈奴得王。侯、從票騎將軍虜五王益封。故匈奴歸義。

杜侯復陸支

以匈奴歸義因孰王從票騎將軍擊左王、以少破多、捕虜三千一百、侯、千三百戸。

衆利侯伊即軒

以匈奴歸義樓剌王從票騎將軍擊左王、手劍合、侯、千一百戸。

臧侯次公

以匈奴歸義王降侯、七百九十戸。

傍線部の「歸義」の関わる部分について見てみると、「故匈奴歸義」という表現と「歸義」がつく王号とに分けられるが、いずれの場合も、特定個人の出自や地位などをあらわすタームとして使用されていると考えられる。したがって、この場合は、前述のような一般的用語ではなく、限定された意味を持つ用語と考えるべきではなからうか。

このうちの「歸義」のつく称号については、功臣表ではすべて王号であるが、『漢書』卷六武帝紀の元鼎五年（前一一二）の条には、

夏四月、南越王相呂嘉反、殺漢使者及其王、王太后。……遣伏波將軍路博德出桂陽、下湟水、樓船將軍楊僕出豫章、下澧水、歸義越侯嚴爲戈船將軍、出零陵、下離水、甲爲下瀨將軍、下蒼梧、皆將罪人、江淮以南樓船十萬人。

とあつて嚴・甲二名の「歸義越侯」が見え、⁽⁴⁶⁾また『漢書』卷九六西域伝下の烏孫の条にも、

至元始中、卑爰寔殺烏日領以自效、漢封爲歸義侯。

とあり、前漢最末期の元始年間（後一〜五）のことではあるが、「歸義侯」授与の例が見られる。⁽⁴⁷⁾

一方、武威磨咀子漢墓出土とされるいわゆる「王杖詔書令」冊の第五簡を見ると、⁽⁴⁸⁾

夫妻俱母子男爲獨寡田母租市母賦與歸義同沽酒醪列肆尚書令

とある。この史料については、その信頼性に疑問を呈する意見もあるが、⁽⁴⁹⁾「漢代のものとして取扱い得る」とされる大

庭氏は、この簡について「夫妻が俱に存命でしかも子男がない者を独寡という。このような者には、田租や市賦を免除すること、⁽⁵⁰⁾歸義（周辺民族の中国へ帰順してきた者）の民に与えてある優遇と同様にし、……」と解釈しておられる。

これは、つづく第六簡の記述に従えば、成帝建始元年（前三二）九月に出された詔令であるが、詔令は法制文書であるから、そこで用いられている「歸義」は、税免除の恩典を与えられるなど特定の立場にある異民族を指す法制上の専門用語として使用されていることは明らかで、功臣表に見える「故匈奴歸義」の「歸義」も、それと同様の用語と考えられる。

以上のように、「歸義」という語は、先に検討した一般的用語として使用される場合とはべつに、「歸義王」などの特定の地位を示す称号に用いられる場合や、限定的な意味を持つ法制上の専門用語として使用される場合があつた。⁽⁵¹⁾それでは、そうした場合の「歸義」のつく称号あるいは「歸義」は、どのような意味を持っているのであろうか。

四

前掲功臣表の「歸義」のなかでもっとも注目されるのは、瞭侯の次公という人物に関する記事である。彼は「匈奴歸義王」という身分から「降」つて列侯に封じられているが、このことから「歸義王」の性格が浮かび上がってくる。「歸義王」が諸侯王と同じ内臣の王でないことは明白であるが、内属の場合に漢の二十等爵に「比」せられた固有の称号とも考えられない。前節で指摘したように、内属は「降」の一形態であり、一旦内属した者がさらに「降」るのはおかしいからである。しかし、この「歸義王」が漢によって授けられたものであることは、「歸義」という語を冠する点から見ても、また時期は下るが、前掲西域伝の「歸義侯」授与の例から見ても、間違いない。すると、次公は、「降」つて列侯に封ぜられる前の時点ですでに何らかの形で漢に帰服し、それによって「歸義王」を授与されていたわけで、その帰服行為は「降」の範疇には入らないものということになる。

一方、功臣表に見える他の四名について検討してみると、「故匈奴歸義」と記されている宜冠侯高不識と煇渠忠侯僕朋の二名は、いずれも校尉として驃騎將軍霍去病に従軍し、功により列侯に封ぜられており、「匈奴歸義因孰王」の杜侯復陸支と「匈奴歸義樓剌王」の衆利侯伊即軒も、やはり驃騎將軍に従軍し、功により列侯に封ぜられている。四名は、従軍した時の功によって列侯に封ぜられている点で共通し、「故匈奴歸義」である高不識と僕朋が校尉という漢の正式な武官として従軍しているのに対し、復陸支と伊即軒は「歸義因孰王」と「歸義樓剌王」という身分で従軍している点が異なっている。

これらの点について検討してみると、まず復陸支と伊即軒の王号は匈奴固有の王名に「歸義」を冠したもので、先の次公の「歸義王」と同じであろうから、「歸義王」は、「降」以外にも、従軍して功をあげれば列侯に封ぜられたことがわかる。一方、「故匈奴歸義」の高不識と僕朋は、従軍した時の功によって列侯に封ぜられた点で「歸義王」と共通するから、その基本的な身分は「歸義王」と同じと考えられる。とすると、「故匈奴歸義」の「歸義」は、「歸義王」などの称号を授与される場合の漢への帰服行為、ないしは帰服した者の身分を示す語であり、「歸義王」「歸義侯」など「歸義」を冠した称号は、そうした身分にある王や侯などという意味で、「歸義」という帰服行為をした者に与えられる称号と考えられる。

この「降」の範疇には入らない漢への帰服行為である「歸義」、あるいはその行為者の身分を示す「歸義」について考えてみると、「歸義」者は、「降者」ではないから、内臣ではない。しかし、彼らは、「降」以外に、従軍して功をたてることによって漢の爵位を授与され内臣となることができ、また、高不識と僕朋が校尉という漢の正式な武官となっていることから、漢の官職につくこともできたことがわかる。前掲『漢書』武帝紀に見える「歸義越侯」の敞と甲が將軍に任ぜられて出兵していることも、「歸義」者が従軍や就官が可能な身分であったことを示唆している。⁽⁵²⁾ 従軍は「歸義」以外にも例があるが、前掲の「王杖詔書令」冊の「歸義」の例などから見ても、この場合の「歸義」が単なる外臣となることや、外臣としての身分を示すものとは考えられないから、この場合の「歸義」は、いわば内臣と外臣の中間的な意味を持つものとしてとらえることができよう。

以上のように、「歸義」には、一般的な用語としての意味と、内臣と外臣の中間的存在を示す限定的な用語としての意味とがあった。本稿では、前者を広義の「歸義」、後者を狭義の「歸義」と呼ぶことにするが、狭義の「歸義」の場

合、異民族は「歸義」すると、「歸義王」などの「歸義」を冠した称号を授与されて、「歸義」という特殊な身分となった。⁽⁵⁴⁾ 彼らは、さらに「降」つて内臣となることもできたが、従軍して功をたてて内臣となることも可能で、また内臣とならなくても「歸義」身分のまま漢の官職につくことができた。

しかし、狭義の「歸義」については、史料上の制約が大きく、ここまでの事例のみでは十分に検討を尽くしたとは言いがたい。そこで、なお一名、史料が比較的豊富である人物について、節をあらためて検討してみたい。金日磾がその人である。

第三節 金日磾について

一

『史記』卷二〇建元以来侯者年表の褚少孫による補を見てみると、金日磾について次のように記されている。

金翁叔名日磾、以匈奴休屠王太子、從渾邪王將衆五萬降漢、歸義。侍中事武帝、覺捕侍中謀反者馬何羅等功侯、三千戸。中事昭帝、謹厚、益封三千戸。子弘代立、爲奉車都尉、事宣帝。

この記事によれば、匈奴の休屠王の太子だった金日磾は、「渾邪王の衆五萬を將いて漢に降るに従い、歸義す」と伝えられている。渾邪王の「降」は五属国設置の契機となった事件であるが、金日磾はその「降」に従つて「歸義」したことになる。また、さらに「侍中もて武帝に事え、侍中の謀反者馬何羅等を覺捕するの功もて侯たり」とあることから、彼は謀反者逮捕の「功」によって列侯に封ぜられたことがわかる。このように、彼が、まず「歸義」し、その後

に侍中という官につき、さらに「功」によって列侯に封ぜられたとすれば、これは前節で指摘した狭義の「歸義」者の封侯パターンと基本的に一致する。

しかし、この記事に関しては疑問もある。それは、まず第一に、「降」に従って「歸義」とするというのはどういうことなのか、ということである。前節で指摘したように、狭義の「歸義」は「降」とは異なるわけであるから、金日磾は、降者集団に「従」っていないながら、「降」とは異なる行動をとったことになる。第二には、『漢書』の功臣表を見ると、功状には「駙馬都尉も侍中莽何羅（馬何羅）の反さんとするを發覺するを以て侯たり」とあるのみで、金日磾について「歸義」と記さないだけでなく、匈奴出身者であることにもまったく触れていないが、それはなぜであろうか。そこで、以下、『漢書』の金日磾伝について検討してみたい。

二

まず、『漢書』卷六八金日磾伝の必要部分について、以下に引用しておく。

- (a) 金日磾字翁叔、本匈奴休屠王太子也。武帝元狩中、票騎將軍霍去病將兵擊匈奴右地、多斬首、虜獲休屠王祭天金人。……於是單于怨昆邪、休屠居西方多爲漢所破、召其王欲誅之。昆邪、休屠恐、謀降漢。休屠王後悔、昆邪王殺之、并將其衆降漢。封昆邪王爲列侯。日磾以父不降見殺、與母閼氏、弟倫俱沒入官、輸黃門養馬。時年十四矣。
- (b) 久之、武帝游宴見馬、後宮滿側。日磾等數十人牽馬過殿下、莫不竊視、至日磾獨不敢。日磾長八尺二寸、容貌甚嚴、馬又肥好、上異而問之、具以本狀對。上奇焉、即日賜湯沐衣冠、拜爲馬監、遷侍中、駙馬都尉、光祿大夫。

日磾既親近、未嘗有過失、上甚信愛之、賞賜累千金、出則驂乘、入侍左右。貴戚多竊怨曰、陛下妄得一胡兒、反貴重之。上聞、愈厚焉。……日磾自在左右、目不忤視者數十年。……

(c) 及上病、屬霍光以輔少主、光讓日磾。日磾曰、臣外國人、且使匈奴輕漢。於是遂爲光副。……

(d) 初、武帝遺詔以討莽何羅功封日磾爲秬侯。日磾以帝少不受封。輔政歲餘、病困、大將軍光白封日磾、臥授印綬。一日薨。

行論の都合上、(a)と(d)に区分したが、(a)の記事は、金日磾が漢に入るに至った経緯を伝える部分で、それによれば、彼の父休屠王は、單于の怒りを買ひ、その誅を恐れて一旦は昆邪王とともに漢に降ろうとしたが、「後悔」して「降」を中止しようとしたため昆邪王に殺された。この後、休屠王の部衆をもあわせて降った昆邪王は列侯に封じられ、いわゆる五属国が設置されたことについてはすでに述べたが、休屠王の太子であつた日磾は「父の降らずして殺さるを以て、母闕氏、弟倫と俱に官に没入せられ」ている。すなわち、彼は、父が一旦は昆邪王とともに漢への「降者」集団を率いながら、結局はその「降者」の同志たる昆邪王を裏切ろうとして殺されたため、敵国人ないしは謀反者の子として家族ともども官に没入されたものと考えられ、「降者」として扱われなかつたのはもちろん、「歸義」ですらなく、単なる一官奴とされたのである。

それにもかかわらず、なぜ彼は「歸義」と記されたり、あるいは後に列侯を授与されるまでに至つたのであろうか。(b)の記事を見てみると、彼は、ある「游宴」の際に武帝の目にとまって気に入られ、即日拔擢されて侍中・駙馬都尉・光禄大夫に任ぜられている。その後の数十年にわたって常に武帝の左右に仕え、前掲の引用では省略したが、その間の後元元年（前八八）には、謀反をはかつた莽何羅らを「覺捕」という功績をあげた。さらに、(c)にあるように、

彼は武帝の臨終にあたって少主（昭帝）補佐を委嘱され、霍光の「副」となつてその任にあたつたが、『漢書』卷七昭帝紀によれば、始元元年（前八六）九月丙子に死去した。『史記』侯者年表・『漢書』功臣表ともに、先の莽何羅逮捕の功績によつて彼に列侯が授与されたことを伝えているのは、前述のとおりだが、(d)の記事にあるように、実際に列侯を授与されたのは、その死の一日前の病床でのことであつた。

こうした彼の経歴に関する史料のなかで注目されるのは、(c)の記事である。前述のように、日磾は武帝の臨終にあつて少主（昭帝）補佐を委嘱されたが、その際、彼は、その任を日磾に譲ろうとする霍光の意見に対し、「臣は外國人」と述べて辞退している。この時の経緯については、『漢書』卷六八霍光伝に、

後元二年春、上游五柞宮、病篤、光涕泣問曰、如有不諱、誰當嗣者。上曰、君未諭前畫意邪。立少子、君行周公之事。光頓首讓曰、臣不如金日磾。日磾亦曰、臣外國人、不如光。上以光爲大司馬大將軍、日磾爲車騎將軍。

とあるが、この記事でも日磾が「臣は外國人」と述べたことが伝えられている。(b)の記事にもあるように、この後元二年（前八七）までの段階で、すでに日磾は数十年にもわたつて侍中・駙馬都尉・光祿大夫として武帝の左右に仕えてきたにも関わらず、彼は「外國人」なのである。金日磾伝・霍光伝ともに、彼が昭帝補佐の筆頭格就任を辞退した理由としてこの言を記し、実際に彼が筆頭格とならずに霍光の「副」すなわちナンバー2の地位についたことから見て、彼が「外國人」であるというのは、単なる彼の意識の問題ではなく、現実の漢における彼の身分が「外國人」であつたことを示すものと考えられる。

このことは、(d)の記事とも合致する。すなわち、彼が列侯を授与されたのは死の一日前、昭帝紀の死亡記事から見れば、始元元年九月乙亥のこととなるが、昭帝期に入ってからのことである。第一節で指摘したように、漢の二十等

爵を授与されることは漢人となることを意味するが、ここまで彼が爵を授与されたこと示す記録は皆無であるから、この列侯授与によって彼は初めて漢人となったわけで、それまでは「外國人」だったのである。

このように考えてみると、昆邪王の「降」に「従」って漢に入ったことは事実だが、官奴に没入されて、本来は「降者」でも「歸義」でもありえなかった金日磾が、あえて「歸義」と記された理由が明らかとなってくる。すなわち、彼は武帝によって侍中・駙馬都尉・光禄大夫に拔擢されたが、それには彼が「降者」か狭義の「歸義」であることが必要であつた。すでに指摘したように、「降者」ならば、漢人と同じであるから、侍中等の官につくことには何ら問題がないが、しかし彼が漢に入るに至つた事情から見て、彼を「降者」として扱うのは不可能であろう。一方、前節で指摘したように、狭義の「歸義」の場合は、漢人としては扱われないが、漢の官職につくことはできた。したがって、褚少孫が「歸義」と記したのは、武帝の拔擢を可能とし、さらにそれを前提とした列侯授与のためには、「降者」ではありえない彼の身分を、便宜上「歸義」に変更することが必要であつたからであり、実際に彼を侍中等の官につける際には、そうした手続きが行なわれたのではなからうか。一方の「歸義」と記さなかつた『漢書』功臣表が、同時に匈奴出身者であることも言及しなかつたのは、事実を尊重して「歸義」と記さない立場をとるならば、「降者」でも「歸義」でもない異民族出身者が、功によって列侯に封ぜられるという、漢の制度上ありうべからざることを記すことになつてしまふからだつたのではなからうか。

とすると、漢人ではないにもかかわらず、漢の官職につくことができるという狭義の「歸義」身分とは、漢朝において、どのように位置付けられるものであろうか。前節では内臣と外臣の中間的な存在と指摘したが、戦国秦においては、有名な李斯の例などで明らかのように、他国出身者すなわち「外國人」であつても秦の官職につくことはで

きたが、彼らの秦における身分は「客」であつた。⁽⁵⁷⁾したがって、漢においても同様に考えられるとすれば、狹義の「歸義」は「客」身分と見ることができよう。⁽⁵⁸⁾

第四節 「蠻夷降者」と「歸義蠻夷」の関係とその変化

一

ここまで、「蠻夷降者」と「歸義蠻夷」について検討してきたが、はじめに述べたように、前漢においては、成帝河平元年（前二八）までは、典属国が「蠻夷降者」を管理し、典客（大鴻臚）が「諸歸義蠻夷」を管理していた。この両官の職掌について、ここまでの検討結果をふまえて考えてみると、「蠻夷降者」は、一般的な「降」のほか、属国制の下に置かれる場合、内属という形態をとって「降」ってくる場合など、さまざまであつたが、いずれの場合にせよ、「蠻夷降者」は内臣として扱われた点で共通し、同時にその点が「歸義蠻夷」との最大の相違点ということができよう。したがって、典属国は、内臣となつた異民族を管理する官と見ることができる。

一方、「歸義」は、本来「外の者が君主の正義に帰服する」意であり、実際には、内属を含む「降」から単なる朝貢に至るまで、漢に従属的・和親の態度をとる場合すべてに對して使われる広義の「歸義」と、漢に帰服して「客」身分となる行為ないしはその身分を指す狹義の「歸義」とがあつたが、典客（大鴻臚）の管理するのは「諸の歸義の蠻夷」であるから、⁽⁵⁹⁾基本的には、狹義の「歸義」を含むすべての「歸義」行為をとる異民族を指すものと考えられる。しかし、そうすると、「降」も広義の「歸義」に含まれるから、典属国が管理した「降者」については、典属国と典客

（大鴻臚）の職掌が重複することになってしまいが、そうではなく、実際の異民族との交渉では、異民族の帰服や来朝・朝貢といった行為に対してどのような処遇を与えるのか、すなわち、内臣たる「降者」として扱うのか、それとも外臣・客臣や朝貢国として扱うのか、といった問題は、異民族からの行為を実際に受けてから、その内容や状況等を調査・審査のうえで決定されるはずであるから、最初の対応を典客（大鴻臚）が担当し、そのうえで「降者」として処遇することになったものが典属国の管理下に移されるというのが、異民族との関係処理の基本的形態だったと考えられる。したがって、典客（大鴻臚）は、「歸義」してきた多種多様な異民族すべてに対応し、そのうえで漢と関係を持つ「降者」以外のすべての異民族、換言すれば、内臣とはしない異民族を管理した官と見るべきであろう。

両官の職掌については以上のように考えられるが、はじめに述べたように、典属国は、河平元年（前二八）に、大鴻臚に吸収されて廃止された。吸収されたのであるから、その職掌が消滅したわけではなく、大鴻臚に異民族関係の職掌を統合したということであろうが、それにしても、典属国の官を廃止して大鴻臚に統合したということは、現実の「蠻夷降者」と「歸義蠻夷」に対する処遇の点で、あるいはその事務処理の過程において、両官の職掌に重複する部分や類似する部分が出てきたためであろう。とすると、それは、どのような点であろうか。

二

『漢書』卷八宣帝紀の五鳳三年（前五五）三月の条を見ると、

詔曰、……單于閼氏子孫昆弟及呼遼累單于、名王、右伊秩訾、且渠、當戸以下將衆五萬餘人來降歸義。單于稱

前漢における「蠻夷降者」と「歸義蠻夷」

臣、使弟奉珍朝賀正月、北邊晏然、靡有兵革之事。

とあって、匈奴五万余人が「來降歸義」したと記されており、「降」と「歸義」が同時に使われている。この詔に見える呼遼累單于については、同じ宣帝紀の前年五鳳二年冬十一月の条に、「匈奴の呼遼累單于、衆を帥いて來降するに、封じて列侯と爲す」と見え、さらに、宣帝紀の五鳳三年三月の条では、先の詔のあとにつづけて、

置西河、北地屬國以處匈奴降者。

と見える。「降者」の君長である呼遼累單于に対して列侯が授与され、その「降者」集団を「處」するために属国が設置され、属国制における通常の処置が行なわれているから、詔の「來降歸義」は、手塚氏の指摘のごとく、「歸義」の語を付して「來降」を美化したにすぎない表現とも考えられるが、一方で、『漢書』卷九四匈奴伝下を見ると、

都隆奇乃與屠耆少子右谷蠡王姑耆樓頭亡歸漢。……呼韓邪單于左大将烏厲屈與父呼遼累烏厲温敦皆見匈奴亂、

率其衆數萬人南降漢。

とあり、呼遼累單于らの降の直前には、都隆奇と右谷蠡王の姑耆樓頭なる人物が「漢に歸」していたことがわかる。都隆奇は、神爵二年（前六〇）に死去した虚閼權渠單于の顓渠閼氏の弟、姑耆樓頭は、前掲文中にもあるように、屠耆單于の少子である。⁽⁶²⁾ 詔では、「來降歸義」した者たちを列举して「單于閼氏子孫昆弟……」と記しているが、これを「單于と閼氏の子孫や兄弟」の意に解釈すれば、都隆奇と姑耆樓頭の二名は閼氏の弟と單于の少子であるから、まさにこれに該当する。「歸義」ではなく、「歸す」とあるだけであるし、同じ匈奴伝上には、神爵二年（前六〇）の日逐王先賢揮の「降」を伝えるのに、やはり「漢に歸す」と記す例があるから、この場合も「降」を意味している可能性はあるが、しかし、前掲の匈奴伝下の記事では、呼遼累單于らに対しては「降」を使っているのに対し、都隆奇と姑

脅樓頭の二名については「歸」と表現していることから見ると、この二名は「來降」したのではなく、狹義の「歸義」をしたもので、先の詔の「來降歸義」はそうした「降者」と「歸義」の双方が存在した状況を意味する表現と考えることができる。

そうだとすると、漢は、帰服した匈奴の集団を「降者」と狹義の「歸義」とに分別し、そのうえで「降者」と認定した者を新たに設置した西河・北地兩属国に「處」したことになるが、それならば、「歸義」身分とされた者は、どこに「處」せられたのであろうか。当時の匈奴は、いわゆる五單于乱立による混乱期にあたり、都隆奇と姑脅樓頭が「歸」したのは、屠耆單于が呼韓邪單于に敗れて自殺したためであるが、⁽⁶³⁾残存の部衆の少なくとも一部は率いて漢に「歸」したのであろうから、その集団をどこに置くかは大きな問題であったはずである。この問題について、手がかりとなるような史料はほとんど見いだすことができないが、『漢書』卷七九馮奉世伝には、

元帝即位、……上郡屬國歸義降胡萬餘人反去。

と見え、元帝期の上郡属国では「歸義」と「降胡」がともに居住していた可能性がある。ただし、『漢書』卷九元帝紀の初元元年（前四八）秋八月の条を見ると、

上郡屬國降胡萬餘人亡入匈奴。

とあり、この記事では「歸義」の語が見えないので、馮奉世伝の「歸義」は衍字の可能性も否定できない。これについては、他に判断材料がないため、どちらとも言えないが、もし、馮奉世伝の記事が事実とすれば、五鳳三年（前五五）からわずか八年後の時点で、西河・北地兩属国の間に位置する上郡属国には「歸義」身分の者も居住していたことになる。

このように、宣帝、元帝期には、本来「降者」を処置する属国に、「歸義」身分の者も居住させるようになっていた可能性がある。そこで、この時期に設置された他の属国についても検討してみると、この時期に設置された属国としては、宣帝神爵二年（前六〇）に設置された金城属国があげられるが、その設置を伝える『漢書』卷六九趙充国伝に、

羌若零、離留、且種、兒庫共斬先零大豪猶非、楊玉首、及諸豪弟澤、陽雕、良兒、靡忘皆帥煎鞏、黃抵之屬四

千餘人降漢。封若零、弟澤二人爲帥衆王、離留、且種二人爲侯、兒庫爲君、陽雕爲言兵侯、良兒爲君、靡忘爲獻

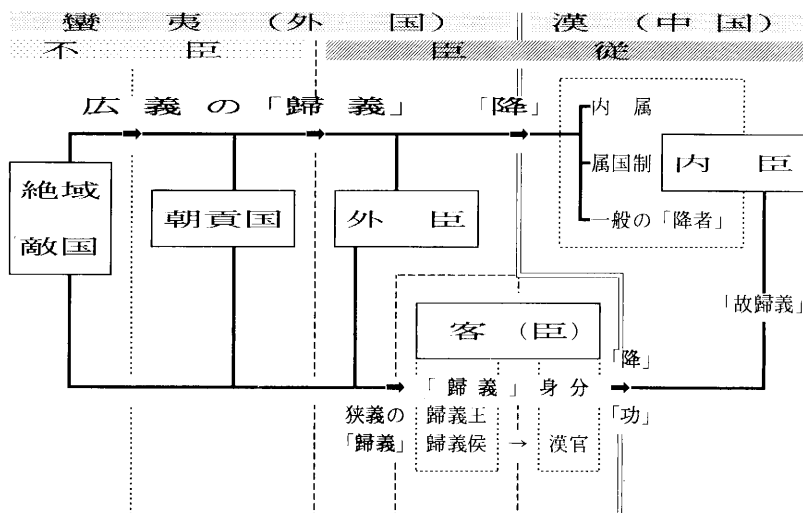
牛君。初置金城屬國以處降羌。

とあり、他の属国設置の場合と異なる点が見られる。すなわち、属国設置にあたって降羌の君長らに対して行なわれた爵位の授与を見ると、列侯以下の二十等爵ではなく、帥衆王・侯・言兵侯・君・獻牛君という称号が授与されているのである。このうちの言兵侯については、第一節の五で、匈奴の侵寇計画を通報した降民に対する授与例をあげたが、それと同じ神爵二年（前六〇）のことであつた。先にも指摘したように、この言兵侯は漢が設定した侯位ではあるが、二十等爵ではない爵位である。そして、その点では、帥衆王以下の他の称号も同様と考えられるから、これらは異民族向けに漢が設定した爵位と言えよう。本稿では、これらを異民族爵と呼ぶことにするが、以上のことから、宣帝期の属国制では、二十等爵ではなく、異民族爵を授与する場合があつたことがわかる。

この異民族爵について考えてみると、内属の際に承認された異民族固有の地位・称号も、二十等爵以外に漢が承認ないしは設定した異民族を対象とする身分秩序という点では、異民族爵に通ずる部分があるが、狭義の「歸義」者に与えられた「歸義王」「歸義侯」などの称号も漢が異民族向けに設定した身分秩序であるから、そうした点ではこれらはまったく同じものと見る事ができる。とすると、宣帝期以降においては、内臣として扱われる「降者」に対する

前漢における「蠻夷降者」と「歸義蠻夷」 概念図

前漢における「蠻夷降者」と「歸義蠻夷」



処遇と、「客」身分である狭義の「歸義」者に対する処遇は、その実質において共通する点を持つようになってきていたことになる。「降者」に対して、異民族爵を授与し、列侯以下の二十等爵を授与しなくなるという傾向は、『漢書』の功臣表に見える異民族への列侯授与例が、昭帝期以降では、宣帝期におけるわずか三例しか見えないことにもあらわれている⁽⁶⁴⁾。

以上のように、「降者」と狭義の「歸義」身分に対する処遇が、爵位の授与や居住地域の点で共通する部分を持つようになったことが、典属国を廃止して大鴻臚に統合した背景の一つと考えられる。すなわち、内臣か「客」という理念的な問題よりも、「外」から帰服する異民族をどのようにして漢の「内」にとりこむか、という現実的な問題の方が優先されるようになり、その点で、帰服する異民族に対して一元的に対処する必要が生じて、典属国を大鴻臚に統合したのである⁽⁶⁵⁾。

むすびにかえて——今後の課題——

以上、前漢における「蠻夷降者」と「歸義蠻夷」について検討してきた。その検討結果によつて想定される漢と異民族との関係は、前掲の図のように示すことができるであろう。また、「蠻夷降者」と「歸義蠻夷」に対する処遇の問題から、典属国と典客（大鴻臚）の職務についても言及したが、両官の内容や関係等については、まだ多くの問題を残している。とくに、典客から大鴻臚までの変遷には不明な点が多く、また、第四節で指摘したように、前漢後半期においては属国制に変化が見られたが、その時期から後漢に至るまでの属国制の内容と変化についてもまだ明らかではない。いずれも、今後の課題としたい。

- 1 拙稿「前漢における属国制の形成——「五属国」の問題を中心として——」（『史観』一三四 一九九六年三月）
- 2 ただし、矢澤悦子氏は、『太平御覧』卷三三「職官部三〇」に「漢書」又曰、典客、秦官、掌諸侯歸義蠻夷、有丞」とあることを根拠として、現行の『漢書』百官公卿表の典客の記事は「侯」字が脱落していると指摘しておられる。矢澤悦子「戦国秦の異民族支配と『属邦』」（『明大アジア史論集』創刊号（一九九六年度）一九九七年三月）三八頁。なお、陳直『漢書新証』（天津人民出版社 一九五九年初版 一九七九年第二版）も「掌諸侯」とする。
- 3 倉修良主編『史記辞典』（山東教育出版社 一九九一年）の「匈奴歸義王」の項（一八七頁）の説明にも「原属匈奴之王、降漢。旧称降漢為『帰義』」とある。

4 手塚隆義「前漢の投降胡騎に就いて」(『蒙古』二 一九三九年五月) 六六〜七頁。

5 栗原朋信「文献にあらわれたる秦漢璽印の研究」(同氏著『秦漢史の研究』所収 吉川弘文館 一九六〇年) 二七二頁および二八〇頁注(6)。

6 米田賢次郎「前漢の匈奴對策に關する二三の問題」(『東方學』一九 一九五九年) 三節。

7 ただし、矢澤氏前掲論文は、『漢書』百官公卿表の典客の記事を訂正されたうえで(本稿注2)、典客の本来の職務は「掌諸侯」のみで、百官表の記事は河平元年以後の大鴻臚について記したものであり、それまでは典属国のみが異民族を担当していたと解釈されるが、「降者」と「歸義」の区別についてはまったく言及されていない。

8 拙稿(前掲注1) 参照。

9 本表は、功臣表の功状記事で、明らかに異民族出身者とわかる者を抜き出して作成した。本表収録の者以外にもその可能性がある者がいるが、本表は功臣表の記事のみによった。また、卷十六高惠高后文功臣表に見える弓高壯侯韓頰當と襄城哀侯韓嬰(文帝十六年に匈奴相国として降)は、卷十七景武昭宣元成功臣表の序文に「漢興至于孝文時、乃有弓高、襄城之封、雖自外徠、本功臣後」とあるように、匈奴に逃亡した韓王信の子と孫であり、異民族出身者ではないので収録しなかった。景武昭宣元成功臣表の亞谷簡侯盧它之(燕王綰の子・景帝中五年に匈奴東胡王として降)も同様である。なお、高惠高后文功臣表には、高祖期に、陽都敬侯丁復、貫齊合侯傅胡害、海陽齊信侯搖母餘、終陵齊侯華母害、袁棗端侯革朱の五名、高后期に、南宮侯張買の一名、計六名の越人と考えられる例が見えるが、いずれも高祖の功臣として列侯に封ぜられたものであり(本稿第二節二参照)、また秦末漢初の動乱期で、異民族の漢朝への従属という面でも特殊な例と考えられるので、本表には収録しなかった。

10 拙稿(前掲注1) 参照。なお、表では18〜22番と52・53番がそれにあたる。

11 拙稿(前掲注1) 参照。

12 この記事で海常侯に封ぜられている蘇弘は、「故の其の校の司馬」とあるから、越族出身者の可能性があるが、功臣表の功状では「伏波の司馬」とあり、それによる限り、越族と断定することはできないので、本稿の表には収録していない。注9参照。

13 『史記』巻一一四東越列伝にもほぼ同様の記事があるが、故甌駱將左黃同についての記事は見えない。なお、『史記』侯者年表と『漢書』功臣表は「甌駱左將黃同」につくるが、『漢書』南粵伝は「甌駱將左黃同」につくる。

14 小林聡「漢時代における中國周邊民族の内属について」（『東方學』八二一九九一年七月）。

15 『漢書』卷九九王莽伝上に「乃遣中郎將平憲等多持金幣誘塞外羌、使獻地、願内属。憲等奏言、……問（羌豪）良願降意、對曰……故思樂内属。宣以時處業、置属國領護」とある。これは王莽が演出させた内属劇で、西海郡設置に至るが、奏言中で、内属の意図を「降意」と表現し、内属に対応して属国設置を進言していることから、やはり内属が「降」の一形態であり、属国制が降者処遇の一形態であることがわかる。

16 前掲表53番の義陽侯厲温敦は、功臣表の始封の項に、「四年、坐子伊細王謀反、削爵爲關内侯、食邑千戸」とあり、列侯から関内侯に格下げされていることがわかる。関内侯授与の例ではないが、関内侯が授与されうること示唆する例と言えよう。

17 李永良・吳昶驤・馬建華积校『敦煌漢簡积文』（甘肅新華書店 一九九一年）一三五七～一三六一簡、李均明・何双全編『散見簡牘合輯』（文物出版社 一九九〇年）「甘肅敦煌酥油土漢簡」一七〇～一七四簡（一九頁）など。

18 大庭脩『漢簡研究』（同朋舎出版 一九九二年）第四章参照。

19 夜郎については、同じく『漢書』西南夷伝に「遂平南夷爲牂柯郡。夜郎侯始倚南夷、南夷已滅、……夜郎遂入朝。上以爲夜郎王」とある。

20 栗原氏前掲論文の第四章第六節などを参照。なお、中国におけるこの印に関する主な研究については、王人聰編『新出歴代

蠻印集釋』(香港中文大學文物館專刊之三 一九八七年) 三五～三七頁にまとめられている。

21 小林氏前掲論文第一節および第二節参照。

22 『漢書』卷九四西域伝下の元寿二年の条に「西域内屬」とあり、『後漢書』卷八八西域伝序文にも「武帝時、西域内屬」とある。なお、小林氏前掲論文参照。

23 この記事は、『漢書』卷七昭帝紀にも、昭帝の詔としてほぼ同文の記載がある。

24 栗原氏前掲論文の第四章第六節などを参照。

25 小林氏前掲論文第三節参照。

26 現時点では例が少ないので断言はできないが、「漢」字を冠さない前漢の異民族印の出土例としてあげられる「越青邑君」「越留陽君」の両印が、やはり内属した越のものであることもその傍証となるかもしれない。両印に関しては、葉其峯「古代越族與蠻族的官印」(王人聰・葉其峯『秦漢魏晉南北朝官印研究』香港中文大學文物館專刊之四 一九九〇年一月所収) 参照。ただし、葉其峯氏によれば、こうした規格の印は前漢武帝期までの異民族印の特徴であるという。また、栗原氏(注24参照)は、「滅王之印」は東夷濊君南閭が授与されたものと推定されるが、そうだとすれば、この場合も湏王の場合と同様の例と考えられる。なお、岡崎敬「夫租歲君」銀印をめぐる諸問題」(『朝鮮字報』四六 一九六八年一月) 第五節も参照。

27 栗原氏前掲論文一九八頁参照。

28 以上のような印綬授与の特例措置については、後漢においても同様の例が見られる。拙稿「後漢の異民族統治における官爵授與について」(『東方學』八〇 一九九〇年七月) 参照。なお、金印紫綬授与の特例としては、烏孫の大吏・大祿への授与(『漢書』卷九六西域伝下、烏孫国の条参照) もあげられる。

29 一般の「降」の場合も、降者には一定の保護が与えられる規定があつたようであるが、現実には守られないことも多かったようである。『漢書』卷九〇酷吏伝(楊僕)に「南越反、拜爲樓船將軍、有功、封將梁侯。東越反、上欲復使將、爲其伐前勞、

以書勅責之曰、……前破番禺、捕降者以爲虜、掘死人以爲獲、是一過也」とあり、また『漢書』卷七〇段会宗伝に「康居太子保蘇匿率衆萬餘人欲降、會宗奏狀、漢遣衛司馬逢迎。會宗發戊己校尉兵隨司馬受降。司馬畏其衆、欲令降者皆自縛、保蘇匿怨望、舉衆亡去」とあることなどは、そうした例であるが、いずれの場合も、担当者にはさほど厳しい処分を受けておらず、それがこうしたことの背景の一つとも考えられる。

30 前掲の表の34番を参照。なお、上奏文の群臣第11番目の杜侯屠耆堂も、もと匈奴の歸義因孰王から杜侯に封ぜられた復陸支の孫（本稿第二節および『漢書』卷十七景武昭宣元成功臣表参照）だが、やはり他の漢人の群臣とは何らの区別もされていない。

31 拙稿（前掲注1）参照。

32 王先謙『漢書補注』参照。なお、言兵侯については、本稿第四節参照。

33 拙稿（前掲注1）参照。

34 小林氏前掲論文第二節および第三節参照。

35 ただし、この史料の「其の民の爵を不更に比す」については、「民」を衍字とする説もある。しかし、工藤元男氏「睡虎地秦墓竹簡の屬邦律をめぐって」（『東洋史研究』四三・一一 一九八四年）七九〜八一頁参照。

36 謝桂華・李均明・朱国焯編『居延漢簡釈文合校』下（文物出版社 一九八七年）の五一二・三三五A（六一二頁）。なお、永田英正『居延漢簡の研究』（同朋舎 一九八九年）第一部第二章（二七二頁）、第三章（三二七頁）参照。

37 『越絶書』越絶外伝記吳地伝第三には「漢孝景帝五年五月、會稽屬漢。屬漢者、始并事也。漢孝武帝元封元年、陽都侯歸義、置由鍾。由鍾初立、去縣五十里」と見える。この「陽都侯」は、『漢書』卷十六高惠高后文功臣表に、「越將」だった陽都敬侯「丁復が見え、その子孫である可能性もあるが、同表の記事によれば、元封元年当時には侯家は中断していた。したがって、陽

都侯の特定はできず、漢人であった可能性もあるので、その場合は、漢人に対して「歸義」を使用した例ということになる。
38 ただし、この部分については、「歸□□義」として二字闕とする説と、「歸德就義」に校訂する説がある。蔣禮鴻『商君書錐指』などを参照。

39 『史記』卷一二六滑稽列伝にも「（東方朔）曰、所謂騶牙者也。遠方當來歸義、而騶牙先見。……其後一歲所、匈奴混邪王果將十萬衆來降漢」とあり、「歸義」の主体を「遠方」とするが、後文に「匈奴」とあり、やはり異民族を指している。

40 前掲の表および注9参照。

41 注39の『史記』卷一二六滑稽列伝（東方生）もこの一例と言える。

42 手塚氏前掲論文参照。

43 栗原氏前掲論文第五章などを参照。

44 ただし、漢代においては、「慕義」の用例は少なくないが、「歸化」の用例はあまり見えない。後漢の王充『論衡』程材篇に「帰化慕義」とある。なお、『漢書』匈奴伝はもと「歸死」とするが、本稿では中華書局の校訂に従った。

45 前掲の表の16・17・23・24・28番を参照。なお、16・17・23・24の封侯については、『史記』卷一一一驃騎列伝、『漢書』卷五五霍去病伝にやや詳しい記事がある。

46 同様の記事は『史記』『漢書』の南越伝にも見え、両書ともに「故越歸義侯二人」をそれぞれ戈船・下瀬將軍としたとあり、甲も「歸義越侯」であることがわかる。

47 『漢書』卷九六西域伝下の焉耆国の条には「歸義車師君」という称号が見える。焉耆国の「車師君」というのはよくわからないが、他に「擊車師君」も見え、焉耆国において車師と何らかの関係を持っていた下級君長に漢が与えた称号と考えられる。

48 武威県博物館「武威新出土王杖詔令冊」（甘肅省文物工作隊・甘肅省博物館編『漢簡研究文集』所収 甘肅省新華書店 一

九八四年)、『散見簡牘合輯』(前掲注17)「甘肅武威磨咀子漢墓《王杖詔書令》册」(二五—一八頁)参照。

49 富谷至「王杖十簡」(『東方學報』(京都) 六四 一九九二年三月) 参照。

50 大庭氏前掲書第一編第二章参照。

51 敦煌漢簡にも、「降歸義烏孫女子 (一九〇六)」、「車師侯伯與妻子人民 十人願降歸德欽將伯等及烏孫歸義 (八八)」、「五校吏士妻子議遣烏孫歸義侯 清子女到大煎都候 (九〇)」、「案十二日平旦 (善?) 稠 侯官君長到安 (怨?) (兵?) 歸義 (七一七)」、「() 内の数字は、李永良・吳初驥・馬建華『敦煌漢簡釈文』(甘肅新華書店 一九九一年)の簡番号」などとあり、「歸義」や「歸義侯」の用例が見られる。なお、最初の一九〇六簡については、大庭氏前掲書二四二頁参照。

52 戈船將軍・下瀬將軍は漢の正式な官職ではなかったであろうが、漢の將軍号という点では、漢の官につくのと類似の行為と言えよう。なお、『史記』卷一一三南越列伝によれば、彼らの到着前に南越は平定され、彼らは功をあげえなかったようである。

53 前掲『漢書』卷六武帝紀の元鼎五年(前一一二)の条には、本文中に引用した文につづけて「越馳義侯遣別將巴蜀罪人、發夜郎兵、下牂柯江、咸會番禺」とある。「越馳義侯」は「歸義越侯」に似ているが、その詳細は不明である。

54 称号の授与は、「歸義」前の異民族内部における地位や漢朝への貢獻度などによって決定されたと考えられる。したがって、地位や貢獻度の低い者には称号は授与されず、単に「歸義」身分が保障されただけか、あるいは場合によっては「歸義」の制度そのものが適用されなかった可能性もあると思われる。

55 拙稿(前掲注1) 参照。

56 このため、金日磾は本稿第一節の表にも収録していない。注9参照。

57 工藤氏前掲論文七四—八一頁参照。

58 「客」身分は、臣従すれば「客臣」であるが、『漢書』卷九四匈奴伝の贊を見ると、呼韓邪單于に対する処遇方法をめぐる議

論を伝えるなかに「宜待以客禮、讓而不臣」とある。呼韓邪單于是実際には客臣待遇となったが、「不臣の客」もあり得たと考えられるので、本稿では「客臣」に限定しない意味で、「客」身分とした。ただし、後掲の概念図では、客臣が含まれることを示すため、「客（臣）」として表示した。

59 河平元年までの典客の職務を「掌諸侯」のみとする意見もあるが（注7参照）、「降者」と「歸義」の区別について一切考慮されていないので、従えない。

60 ただし、功臣表の記事によれば、列侯に封ぜられたのは五鳳三年二月。前掲の表の53を参照。

61 注4参照。

62 『漢書』卷九四匈奴伝参照。

63 『漢書』卷九四匈奴伝参照。

64 前掲の表の51～53。なお、匈奴の降者に対する列侯授与例の減少については、米田氏前掲論文（注6）も指摘しておられる。

65 属国制そのものの変化も、背景の一つと考えられる。また、『續漢書』百官志五には「四夷國王、率衆王、歸義侯、邑君、邑長」とあって、後漢の異民族爵には「歸義侯」が含まれているが、これは、狭義の「歸義」身分の称号が、前漢後半期に異民族爵に吸収されていった結果と見ることできよう。